

「パッセンジャーズ」

2009（平成21）年1月21日鑑賞＜G A G A試写室＞

監督：ロドリゴ・ガルシア

クレア・サマーズ（セラピスト）／アン・ハサウェイ

エリック・クラーク（生存者の1人）／パトリック・ウィルソン

アーキン（航空会社の代表）／デヴィット・モース

ペリー・ジャクソン（クレアの恩師）／アンドレ・ブラウアー

シャノン（クレアの患者）／クレア・デュバル

トニ（クレアの近所の夫人）／ダイアン・ウィースト

ディーン（クレアの患者）／ライアン・ロビンズ

2008年・アメリカ映画・93分

配給／ショウゲート

<ハドソン川の奇跡と好対照！>

09年1月20日のオバマ新大統領の就任式を間近に控えた1月15日に、ニューヨークのマンハッタン西側を流れるハドソン川で起きたのが飛行機の墜落事故。つまり、鳥が左右のエンジンに入り込んだため飛行能力を失ったアメリカの航空会社USエアウェイズの国内線旅客機が、ハドソン川に不時着したわけだ。ベテラン機長サレンバーガーの冷静沈着な判断と機敏な操縦によって、155人の乗客乗員全員が無事救出されたのは幸運としか言いようがない。これぞ、まさにハドソン川の奇跡だ。

もし、この事故で乗客の多くが死亡していたら？さらにもっと怖い想定は、この旅客機がニューヨークの市街地に墜落していたら？その場合は何万人もの死傷者を生み、新大統領の就任式への高揚感など吹っ飛んでしまったことだろう。

そんなビッグニュースを堪能した直後、奇跡的に助かった男女5人の乗客以外は全員死亡という旅客機の墜落事故をテーマとした映画を鑑賞するとは、何とも皮肉なタイミング・・・。

<こんなに早くセラピストがつくの？>

映画冒頭で、軽く見せる旅客機の墜落事故の後、物語はベッドで眠る若いセラピストであるクレア・サマーズ（アン・ハサウェイ）の電話が深夜に鳴りわたるシーンからスタートする。電話の主は恩師のペリー・ジャクソン（アンドレ・ブラウアー）。たった今発生した旅客機事故で、奇跡的に生き残った男女5人の乗客のカウンセリング役として、彼はクレアを指名したわけだ。突然そんな大惨事に遭遇し、生き残った人たちが大きなショックを受けているのは当然だが、こんなに早くセラピストを張りつける必要があるの？しかもペリーからは、「生存者の1人エリック（パトリック・ウィルソン）には気をつける」というケツタイな指示が。それは、明らかなショック状態にある他の生存者と異なり、エリック1人だけはえらく気分がいい状態だったから。ここから、クレアのセラピストとしての腕の見せどころが始まるわけだが、オバマ新大統領が魔法使いでないと同様、セラピストも魔法使いではないから、その仕事は患者の話の聴くことから始まるのが普通。

しかし、クレアはまずはグループ・カウンセリングを提案し、これにエリック以外の生存者は参加したが、エリックは個別訪問だったら受け入れるとのこと。こんな場合、セラピストとしては患者の意向を尊重するのが当然だから、クレアはそれを了解し、エリックの自宅を訪問したが・・・。

<一線を越えることになろうとは・・・>

この映画は93分と短い、前半3分の2はクレアとエリックの治療風景ともいえるし、恋愛模様ともいえるような奇妙な関係の描写にあてられている。クレアがエリックの自宅を個別訪問したのは、あくまでセラピストとしての職務だが、最初の問題はエリックが出した「患者として扱ってくれるな」との要求を受け入れるのか否かということ。私の考えでは拒否すべきだと思うのだが、クレアがそれを受け入れたのがその後のつまづきのもと・・・？

クレアが求める会話は当然事故に関するものだが、エリックが求める会話は恋愛モード、というより明らかな口説き。しかもそれがメチャウまい。高所恐怖症のクレアを屋上に誘って言い寄ってみたり、そこから飛び降りてビックリさせたりは序の口で、オートバイの後席にクレアを乗せて疾走した先はヨットハーバー。他人のヨットを勝手に拝借して沖に乗り出したうえ、1人裸になって冷たい海の中へ飛び込んだのはいいが、いくら待ってもエリックは海上に浮かんで来ない。心配のあまりやむなくクレアも海の中へ飛び込むと・・・？

そんなこんなのエリックのテクニクにまんまとハメられたように海の中で熱いキスを交わした2人が、そのままエリックのベッドに場所を移して一線を越えてしまったのは自然の流れ。しかし、これってかなりヤバイのでは？

<グループ・カウンセリングの進展状況は？>

クレアが受け持った患者はエリックの他4人。しかし、まず「墜落する前に機体が爆発した」と主張していたディーン（ライアン・ロビンズ）がグループ・カウンセリングから姿を消した。次に「航空会社の人間に尾行されている」とアピールしていたノーマン（ドン・トンプソン）もいなくなった。そして、最後に残ったのは「私は不幸に慣れている」という若い女性シャノン（クレア・デュバル）だけ。それは、クレアがエリックとの個別訪問にうつつを抜かしてグループ・カウンセリングに手を抜いたせい？それとも・・・？

<不審な人物がチラホラと>

この映画ラスト3分の1の30分は、『シックスセンス』（99年）に代表されるM・ナイト・シャマラン監督ばりのミステリーの世界に突入する。その「仕込み」として、ロドリゴ・ガルシア監督は前半60分の間に不審な人物の姿をチラホラと提示する。

その第1が、グループ・カウンセリングの様子を窓越しに覗き見している男。彼は一体何者？第2は、クレアの隣人のトニ夫人（ダイアン・ウィースト）。世の中にはお節介なお婆ちゃんがいるものだが、洗濯物の忘れ物を届けてくれたり、クレアの元を訪れたエリックをハンサムだと批評したり、何かとお節介を。これにはクレアはうんざりだが、どうもこれが単なるお節介ではなく何かを探るような雰囲気になってくるから要注意！

第3は、不審な男と言うと失礼だが、航空会社の代表のアーキン（デヴィット・モース）の動き。一連の流れの中で航空会社の陰謀説を疑いはじめたクレアがアーキンの元を訪れ、事故の真相を質問すると、「事故の原因はパイロットの過失」の一辺倒。そりゃ当然だろうが、その言い方はあまりにも不自然・・・。

さて、この3人の不審な人物の動きは、ラスト30分でどのように收拾を？

<恩師も怪しい！>

私が当初から疑問に思ったように、クレアもなぜ事故直後からセラピストが生き残った乗客に張りつくの？と疑問を持つべきだった。ところが、クレアは信頼する恩師ペリーからこんな大切な仕事を任せてもらったことに感激し、何の疑いも持たずに一生懸命職務に励んだが、そこから一体どんな成果が得られたの？

私の目でシビアにクレアの勤務評定をすれば、グループ・カウンセリングを受けていた4人の患者が、シャノンだけを残して去っていった時点で成果はほとんどゼロ。また個別訪問のエリックと一線を越えて、不適切な関係になったことは大きなマイナスポイント。ところが、そんなクレアの活動をペリーは高く評価したから、それはなぜ？ひょっとしてペリーはセラピストのクレアを利用して生存者たちに語らせ、情報収集をしようとしていたの？そんな風に恩師のペリーすら疑い始めたクレアは、再度アーキンを追及するべくある行動をとったが・・・。

<結末は決して口外しないでください！>

『シックスセンス』以降ミステリー性を売りモノにする映画のプレスシートには、「結末を決して口外しないでください」と書かれていることが多い。そして、この映画はまさにその典型。この映画は旅客機の墜落事故をテーマとしたものだが、映画の冒頭は客席内の観客の姿を少しずつ見せるだけ。つまり、ジェット機が火を吹くシーンや墜落していくシーン、そして地上に激突して大爆発を起こすシーンなどド派手なシーンが一切登場しないまま、クレアの自宅の電話音に繋がっていく。そして、映画はその後1時間エリックの個別訪問をメインとしたクレアのセラピストとしての活動を描いていくが、そこでも旅客機の墜落シーンは登場しない。しかし、それだけでは映画の出来としてはイマイチ。すると、ラスト30分でそんなシーンのあれこれが登場するの？そんな期待をもってラスト30分に注目するとともに、あっと驚く結末についてはしっかりあなた自身の目で。

2009（平成

21）年1月23日記